

高校生が英語力、論理的思考力を競う！

## 県の英語教育の底上げを目指し、山梨県で初の英語ディベート大会を開催

2016年2月、山梨県立甲府昭和高校において、山梨県で初めての全県規模となるディベート大会「Yamanashi Cup 2015」が開催された。山梨県高等学校教育研究会の英語部会が中心となり、先進県の助言を受けながら、2年前から準備を進めてきた。県立・私立計10校、73人の高校生ディベーターが参加した大会当日の様態と、大会開催に至る道のりをレポートする。

### 2年間をかけてディベートとは何かを知る

2016年2月、「Yamanashi Cup 2015」の開会式会場の山梨県立甲府昭和高校のホールは熱気にあふれていた。出場する高校生や引率の教師、応援に駆けつけたクラスメート、さらには県内の中学・高校の英語教師や中学生ら、多くの観客が詰めかけていた(写真1)。

この大会は、16年度に実施予定の山梨県高校生英語ディベート大会の本大会に向けた「プレ大会」として実施され、山梨県内の高校10校、高

校生73人が出場した。本大会は、毎年12月に行われるHEnDA主催の「全国高校生英語ディベート大会」(\*)の山梨県予選を兼ねて行われる。

今回のプレ大会の目的は、運営ノウハウを蓄積し、本大会の質をより高めると同時に、学校間での生徒・教師の交流、指導力の向上を進め、県全体での英語ディベートの認知を高め、英語教育の底上げを図ることだ。

県内初のディベート大会に向けた道のりは、14年度に始まった。当時の阿部邦彦山梨県高等学校教育研究会英語部会会長(現山梨県教育委員会教育長)の発案を受けて、同年6月、英語部会総会で2年後の大会実施が

決議された。大会に企画段階からかわる英語部会の池谷佐知子副会長(葦崎高校教頭)は、こう語る。

「ディベートは英語の4技能を総合的に育成できる活動であり、CAN-DOリストの到達目標の1つでもあります。ディベートを県内に広めることで、生徒の英語力の向上を図りたいと考えました」

準備は、教師自身がディベートを知ることから始まった。既に英語ディベート大会を開催し、その指導にあたって近隣の英語教師や、英語教育を専門とする大学教員らをして講演会やワークショップを実施。ディベートの魅力や教育効果、指導

図1 「Yamanashi Cup 2015」概要

- **論題** 日本は、法的な成人年齢を18歳に引き下げるべきである。  
Japan should lower the age of adulthood to 18.
- **出場校** 県立 葦崎高校、甲府西高校、甲府南高校、甲府昭和高校、都留高校、都留興譲館高校、吉田高校  
私立 山梨英和中学校・高校、駿台甲府高校、山梨学院大学附属高校
- **ジャッジ(審査員)** 神田外語大学講師・田島慎朗、長野県松本県ヶ丘高校教諭・池上博、長野県屋代高校教諭・ジョシュア・コピトスキー、埼玉県立浦和北高校教諭・丸橋洋之、さいたま市立浦和高校教諭・浜野清澄

\*詳しくは全国高校英語ディベート連盟 (HEnDA) のウェブサイトをご覧ください。  
<http://henda.global/>

法などを学び、各校は授業に積極的に  
にディベートを取り入れていった。

早速、実戦にも参加。14年12月、  
山梨県立谷村工業高校（現山梨県立  
都留興譲館高校）が山梨県勢として  
は初めて「全国高校生英語ディベ  
ート大会」に出場、翌年2月、山梨県  
立甲府昭和高校が「高校生英語ディ  
ベート大会ウインターカップ」に出  
場し、ディベートを堂々と披露する  
など、徐々に機運が高まっていった。

プレ大会の開催は、15年6月の英  
語部会総会で決定。前年に引き続き、  
講演会などを開き、同年10月には、  
山梨県立吉田高校が「全国高校生英  
語ディベート大会」甲信越ブロック  
大会に参加して善戦した。それらの



山梨県立韮崎高校  
教頭  
**池谷佐知子**  
いけや・さちこ  
教職歴31年。同校に赴  
任して1年目。山梨県  
高等学校教育研究会英  
語部会副会長。



山梨県立吉田高校  
教職歴26年。同校に赴  
任して5年目。山梨県  
英語ディベート大会事  
務局長。  
**上村泰子**  
かみむら・やすこ

経験を経験を英語部会の中で共有する中で、  
教師・生徒の間にディベートを特別  
なものとする意識は薄らいでいった。

## 埼玉県、長野県など近隣の 先進県からノウハウを吸収

大会準備は、吉田高校が事務局（英  
語部会会長・坂本明大校長、同副会長・  
相沢季里教頭）、甲府昭和高校（同副  
会長・三浦浩一教頭）と韮崎高校が  
協力校となり、企画から開催まで英  
語部会が中心となつて進めた。

「英語部会が、県教育委員会、県教  
育センターと連携を取りながら準備  
を進めることで、公立・私立を問わ  
ず県内全ての高校が、研修や大会に  
かかわる情報を共有することが容易  
になりました。大会の意図や重要性  
についても学校間で目線合わせがで  
きたことが、スムーズな運営につな  
がったと思います」（池谷副会長）  
県主催の大会としては後発だった  
ことも幸いした。山梨県は、埼玉県  
や長野県などのディベート先進県に  
隣接しているため、他校の視察や講  
師の招聘が比較的容易に進み、その  
ノウハウを学ぶことができた。プレ



写真1 会場には、出場者のほかに、応援団のクラスメート、英語に関心が高い中学校教師や中学生も集まった。

大会でも、5人のジャッジ（図1）の  
うち4人は両県から英語ディベ  
ート指導の第一人者を招き、試合の判定  
と講評にあたってもらい、大学から  
もジャッジを招くことで、大会の質  
を担保できたと、池谷副会長は言う。  
「ジャッジの先生を始め、先進県の  
先生方の協力があつたからこそ開催  
できました。これからディベート大  
会を実施する場合は、先進県の交流  
の輪に入り、ノウハウを吸収してい  
くことが鍵ではないでしょうか」

## 生徒たちの変化が 教師の不安を払しょく

もちろん、実施に至るまでの道の

りは決して平たんではなかった。何  
よりも懸念されたのは教師の負担だ。  
「県を挙げての大会となると、準備  
や生徒への指導に時間がかかりませ  
う。その上、私たち教師自身がディベ  
ートに慣れていないこともあり、大会  
出場をためらう大きな要因になつて  
いました」（池谷副会長）

また、同県では毎年、英語のスピー  
チ・コンテストとレシテーション・  
コンテストを実施しており、各校が  
2年ごとに幹事校となる。その運営・  
指導に加えて、ディベート大会まで  
行うのは厳しいという声も少なくな  
かった。そうした声に対しては、2  
年間という時間をかけて準備や勉強  
会を重ねていき、少しずつ理解を得  
ていった。大会運営の責任者である  
事務局長の上村泰子先生（吉田高校）  
も、当初は不安を抱える1人だった。  
「英語で考えて、討論するといふこ  
とが、本校の生徒にできるのか、大  
会の実施が決まった後も心配でした。  
しかし、先進県の試合を見学し、生  
き生きと討論する生徒の姿を見て、  
考えが変わりました。同じ高校生な  
のだから、山梨の高校生にもできる  
はず。何よりも、自分の生徒と同じ

\*プロフィールは2016年3月時点のものです

体験をさせたいという思いが、私自身のモチベーションになりました」

上村先生がプレ大会の成功を確信したのは、吉田高校のESS（英会話部）が甲信越ブロック大会に参加した時だ。不安を口にしながら会場入りした生徒たちが、帰りの車中では興奮した面持ちで大会の感想を英語で語り合い、学校に到着するまで明るい会話が途切れなかったという。

「初めての公式戦で12チーム中6位という成績を残し、『自分たちもやればできるんだ』という手応えや充実感を得たでしょう。ディベートへの意欲が高まっただけでなく、大会を通して生徒の気持ちが団結していく様子を見て、やって良かったと心の底から思いました」（上村先生）

## いよいよ迎えた本番 10校73人の生徒が敢闘

プレ大会には10校が出場し、1校につき3試合が行われた（写真2）。試合は全国大会予選と同じルールで進められ、チームの勝ち点、対戦相手の勝敗、英語力を見るコミュニケーション・ポイントを総合して順位が



写真2 試合は肯定側（Affirmative Side）と否定側（Negative Side）に分かれ、「立論」「アタック」「ディフェンス」「総括」の4段階でスピーチを行い、「立論」「アタック」では質疑応答も行う。

決まる。全試合に勝っても優勝できるとは限らず、ジャッジの採点が確定するまで順位の方は分からない。

ディベートの論題は、「日本は、法的な成人年齢を18歳に引き下げるべきである」（プレ大会であるため、過去の全国大会の論題を使った）。出場登録できるのは1校8人までで、試合に出られるのはそのうち3〜4人だ。3試合で全てのチームが肯定側・否定側の両方の立場を経験するように組み合わせられた。既に県外で複数の試合に出場した経験のあるチームから、ディベートに初挑戦というチームまで、各校のレベルは様々だった。チーム内でメモを回して情報をタイ

写真3 次のスピーチの作戦を練るために、相手のスピーチの内容や自分の考えを付せんに書き、チーム内で共有する姿も見られた。



写真4 試合後にはジャッジが試合内容を講評し、ディベートに勝つためのポイントを伝授。それを熱心に書き取る生徒もいた。

ムリーに共有するチームもあれば（写真3）、言葉に詰まって沈黙が続くチームもあったが、自分の考えをきちんと伝えようとする姿勢、相手の主張に耳を傾けるマナーの良さは、どのチームにも共通していた。

毎回の試合後には、ジャッジが各チーム1人の「ベストディベーター」を発表し、試合を講評した（写真4）。「エビデンスを示さなければ、それは単なる意見」「質問は次のアタックにつながるように誘導しよう」といった、全国大会を見据えた実戦的なアドバイスがなされ、出場した生徒はもちろん、試合を見守っていた教師や生徒たちも熱心に耳を傾けていた。

9時に第1試合が始まり、14時頃に全試合が終了。参加者全員がホールに集まり、ジャッジ一人ひとりが講評を述べた後、阿部教育長が登壇し、「山梨県の英語教育のエポックメイキングの日になった」と大会の成功を祝った。最後に、試合結果が発表され、優勝は吉田高校、2位は甲府西高校、3位は甲府南高校に決まり、3チームが登壇しての表彰式が実施され、大会は幕を閉じた。

## 大会運営体制の整備と 参加校の増加が課題

初めてのディベート大会は成功裏

## 勝因は、徹底した事前準備とメンバーのチームワーク

私たちは、ESSの有志で、2015年度に発足したチームです。今回は、甲信越ブロック大会に続く、2回目の公式戦でした。山梨県で初めて開催されたディベート大会で優勝できて、光栄です。

勝因は、事前準備がしっかりできたことだと思います。情報収集はチーム全員で行い、必ず共有して頭にたたき込むようにしました。また、自分たちの論に穴はないか、あるいは相手の論を予想し、どのようにアタックするのか、本番を想定して討論の中身を徹底的に検討しました。

一度でき上がったコンストラクティブ・スピーチの原稿を、丸ごと書き直したこともありました。全員が納得した論に基づいて、メンバーの1人が原稿を書きましたが、さらに検討した結果、主張が抽象的で、根拠に乏しいことに気づき、別の論を立てることになったのです。論を書いた本人はもちろん、メンバー全員ショックを受けましたが、「勝つためには必要なこと」と納得し、励まし合いながら準備を続けました。

本番では、自分たちの考えをなかなか英語で表現できないことにもどかしさを感じる場面もありましたが、チームワークでカバーできました。相手の質問やアタ

クを聞いている間に、メンバー各自が考えたことなどを付せん

に書いて回し、全員で共有することで、ディ

フェンスやサマリーがスムーズにできて、ジャッジに良い印象を与えられたと思います。ディベートの魅力は、英語力だけでなく論理的思考力や表現力も身につくことだと思います。そのような力は、社会に出た後も、プレゼンテーションや交渉の場面で生きてくるはず。また、ディベートに取り組んだことで、国語や数学などの他教科の学習方法も変わりました。教科書を読みながら、「なぜだろう」「本当にそうなのか」というように深く考える習慣が付き、批判的な読み方や論理的なアプローチができるようになりました。

次の目標は、2016年度の県大会で優勝し、全国大会に出場して好成績を残すことです。これからもメンバーで力を合わせて、スキルを磨いていきたいと思っています。

に終わり、大会運営のノウハウ獲得以上の大きな成果が得られた。何よりの成果は、大会の準備や研修を通して、教師間にディベートに対する理解が広がり、多くの学校が研究発表会や公開授業でディベートを取り上げるようになったことだ。それに伴い、他教科にもディベートの重要性が認知され、国語や地歴・公民でディベートを行うようになった学校もあるという。「生徒を大会に出場させられるレベルの指導はまだできていないけれども、授業で実践してみよう」という教師も増えており、所期の目的が達成されつつあります。自校の生徒は大会に不参加でも、大会運営に協力してくれた教師もいました」と、池谷副会長は手応えを述べる。

今後に向けた課題も浮き彫りになった。その1つが、各校の負担の軽減だ。今回のプレ大会は、他のコンクールと同様に、英語部会の事務局となつている学校が幹事校として運営を主導した。今後は、英語部会の事務局とは別にディベート大会独自の事務局を設けて、1大会につき3校が幹事校となる共同運営体制を検討している。そのため、どの学校が幹事校になつても運営に支障が出ないよう、汎用性の高い運営マニュアルを作成する予定だ。いかに参加校を増やしていくかという点も、大きな課題だ。「英語力の高い学校でなければ大会に出場できないと考えている教師は少なくありません。英語ディベートは一見難しそうに見えますが、使う言葉や発言時のフォーマットがある程度決まっているので、準備さえしっかりできていれば、どの学力層の生徒でも参加できます。情報交換や研修会の機会を設けるなどして、ディベートに対する理解をさらに深め、1校でも多くの学校に参加していただけるよう、工夫を重ねていきたいと考えています」(上村先生)

山梨県は、ディベートを「ルールのあるアクティブ・ラーニング」とも捉え、各教科だけでなく、学校での教育活動全体に応用できると考えて推進しているという。16年春には、全国大会予選となる本大会の準備が始まる。プレ大会の総括を基にまとめた改善点を英語部会で共有した上で、6月の英語部会総会で本大会の詳細を固める予定だ。

\*プロフィールは2016年3月時点のものです